

～ 大 阪 誕 生 年 記 念 大 阪 市 立 近 代 美 術 館 見 学 と
講 義 で 訪 ね る 心 齋 橋 今 昔 物 語 ～

岡田心齋からモダニズム心齋橋まで

講師：元関西大学教授 肥田皓三 氏

大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員 橋爪節也氏

日時：2005年2月19日（土）午後2時～5時

講義会場：ハートンホテル南船場会議室“デージュ”

見学会場：大阪市立近代美術館 仮称心齋橋展示室

岡田心齋ばら「クレスト長堀」をどう見るか

大阪市の不祥事が続き、第三セクターの大幅な赤字が続く。江戸時代の凄腕デベロッパーの岡田心齋が、300年後に自分が開削した長堀川が埋め立てられ、また掘り起こされそして川底に商店が軒を並べるとは想像だにしていなかっただろう。しかも川底に出現した町・「クレスト長堀」が大赤字と岡田心齋が聞いたら「算盤勘定もできんお役人に町の開発なんてまかすからあきまへん」のや。わたしらのような町人に任せへんから赤字なんぞになりますのや！！それに、最近の大阪のお方の何かにつけてお役人任せの気風も問題でんあ。」と嘆いているかも……。中部国際空港のように民間パワーを活かした開発は、利用する市民の視線にあわせた楽しさがあり、合理性があるはずだが、前例がないだけで挑戦的な開発が難しいお役人仕事では大阪の活性化は期待できない。岡田心齋さんは、この大阪の閉塞感をどのように打開できるだろうか……。

船場・島之内生まれの着流しの和服姿に風呂敷の包み。肥田先生のはんなりとした大阪弁に浸っていると戦前の小大丸大堀の店構え、暖簾を潜ると夏でもちょっとひんやりとした空気に満たされ、和服姿で立ち働いている丁稚さんや番頭さんの戦前のお店のゆったりとした空気が髭髯とし、落ち着いた風情を発する戦前のレトロでモダンな心齋橋界隈を散策したような清々しささえあった。産経新聞・毎日新聞にも紹介いただいた今回の企画、モダンな心齋橋を偲んで参加いただく方も多く、あらためて岡田心齋という方の偉業を偲ぶ機会を得た。そして、時代の流れとはいえ、岡田心齋さんの足跡の跡形もなく街の変遷が目まぐるしい昨今の雑然とした心齋橋筋の様子。どこにでもあるドラッグストアや、チェーン店に押され、心齋橋の各店舗がそれぞれに個性を輝かせ店の内装や品揃えを誇っていた時代の面影がかきけられていった。心齋橋ならではの品揃え、店構えは

遠い歴史の記憶になりつつあるのだろうか……。その中でも、江戸時代から続く大丸前の福寿司、講義で江戸時代からの店の味……とその名を聞いて久々に足を踏み入れた。高校や大学生の頃、亡き母と買い物帰りに立ち寄ることがあったなぁと話すと、大森さんもお母様と一緒にそのカウンターに座ったと互い思い出話に浸っていた。手洗いにいった杉山さんの帰りが遅い。どうしたのですかと聞くと、2年前に亡くなった奥さんと一緒に食事した座敷机を暫し眺めていたとのこと。老舗には訪れた客それぞれの思い出が月日と共に刻まれていく。江戸寿司におされながらも、大阪寿司、手土産にしても崩れない「箱寿司」の伝統の味は人々の記憶と共に生きている。変わらないものの大切さが愛おしい。そごうは高層ビルに建て直し中、大丸の玄関先には大きく羽を広げた大きな孔雀がお出迎え。改めて、機能ばかりを追及する近代ビルにはない、街の造詣自体が洗礼された意匠で飾られているモダンな豊かさを改めて顕彰する機会をえることができた。（原田彰子）

心齋橋いまとむかし

元関西大学教授 肥田皓三 氏

昭和37年に顕彰された岡田心齋

本日は心齋橋について、お話をさせていただきますが、心齋橋は、北は土佐堀佐川、東は東横堀川、西は西横堀川、南は道頓堀川に囲まれた大阪でも歴史ある“船場”とよばれている地域の中にございます。

昭和の初め、心齋橋商店街で心齋橋を作られた方を顕彰するイベントをしようということで計画されました。島之内の長老である田中吉太郎さんにたずねられ、当時出版されていた「大阪人」にはいろいろ調べたがよくわからないという文章を書かれております。そこで、心齋橋商店街の方々に更に調べられたところ、江戸時代の医者で「大塚心齋」という方がおられたので、その方が建てられたのだと盛大なイベントをし、更に松竹座でOSKが昭和5年にデビューのテーマに取り上げられました。

ところが、それから30年後、最近講談社から再販され書店の店頭にも並んでいる「大阪ことば辞典」の著者で大阪郷土史家の牧村史陽助氏が、昭和37年に末崎さんという方から妻の実家に伝わる古文書があるのでみてほしいというご依頼を受けられました。それが心齋橋を作った経緯についてまとめた「浪華長堀心齋橋記」と「心齋系図」という家系図でした。奥様は、江戸時代は船場

で、戦前はそごうの前で貴金属を商っていた花田家という旧家から嫁がれた方でした。昭和2年に、船場界限について旧家に伝わる古文章を元に「南区史」の編纂を区役所が行ったことがあったのですが、旧家の大半が家に伝わる古文書は他人にむやみにみせるものではないという風潮が強く花田家も供出されませんでした。大阪大空襲で船場・島之内の旧家に伝わる古文書が灰燼に帰するなかで、「浪華長堀心斎橋記」と「心斎系図」は生き残り、牧村氏の鑑定により、心斎橋を作った人が岡田心斎であるということを顕彰する貴重な古文書であることが紹介され、新聞などで大きく報道されました。「浪華長堀心斎橋記」「心斎系図」は心斎から3代目の当主が、紀州の僧侶に依頼し書き残したものでした。「浪華長堀心斎橋記」には、元和8年に、伏見の4人の町人がお上に願い出て、長堀川の開削し、そのうちの一人美濃屋の主、岡田心斎が長堀川の川沿いに町を作り元禄16年に心斎橋が掛けられたと記載されていました。江戸時代には、本日の会場のハートンホテルや川向こうの鰻谷・島之内なども心斎町と呼ばれ、岡田心斎も住んでいました。ですから、岡田家の御子孫が花田家でそこに代々古文書が受け継がれてきた古文書によって、心斎橋が岡田心斎によって作られましたことが立証されました。

心斎橋の変遷

さて、「心斎橋」の橋の変遷についてお話ししましょう。

江戸時代の心斎橋の姿はどんなものであったかを探索してみましょう。大阪は八百八橋といわれるほど橋の多い

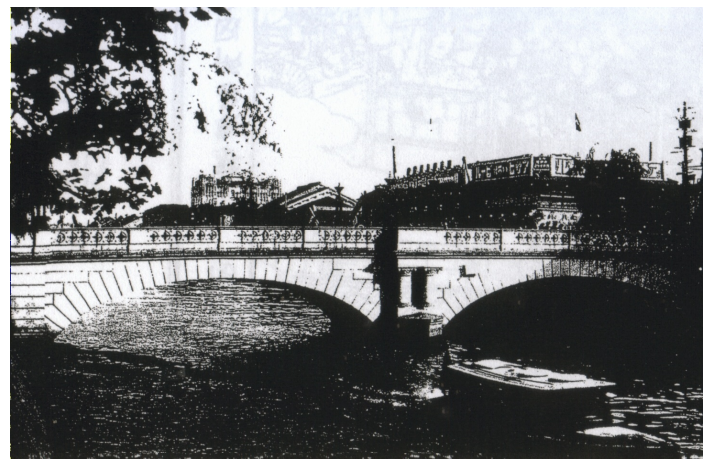


町でしたが、意外に心斎橋の姿を残す資料が少なく、昭和60年に芦屋の会社社長の広瀬正巳さんという方の蔵から「花の下影」雪月花三冊と銘打たれた著書不明の冊子が発見されました。そこには、一ページに一店ずつ312店の江戸時代の食べ物屋さんを写生し、食を囲む庶民の暮らしぶりまでもが和紙に肉筆で色鮮やかにユーモラスに生き生きと描かれていました。朝日新聞の阪神支局がその絵を取り上げて「花の下影 幕末浪花のくだおれ」と題して新聞で連載し、昭和61年に清文堂出版から書籍として出版されました。その中に紹介されている「心斎橋 涼茶店」の絵では、橋の袂の欄干の傍に茶

屋があり、橋の上の涼み台に浴衣がけの客が団扇片手に夕涼み、対岸にはお屋敷の白塀に木々がそよぎ、長堀川に漕ぎ出した屋形船からは赤い提灯の下から三味線の音が聞こえてきそうな風景が展開していた頃の姿です。



そして、時代は、文明開化の明治時代へ。明治3年に大阪で初めて高麗橋が鉄橋に建て替えられ大阪の人々に西洋化への橋渡しをしていくのですが、明治6年にはドイツ製の弓形小橋という形で心斎橋も大阪で第二の鉄橋へと姿を変えます。この橋には元来の日本の木造の橋のように橋の欄干がなく、橋を見慣れていた大阪人を驚かせ、これこそ“文明開化だ”と鉄橋に姿を変えた心斎橋の錦絵が大阪の名所として数多く売り出されました。今は貴重となった心斎橋の錦絵を、本日もこの会場にお越しの心斎橋の仲尾書店が復刻されました。どれも色鮮やかな作品ばかりです。細版画だけではなく、大錦といって3枚つづりのパノラマ図のような錦絵も売り出され、造幣局に次いで鉄橋の心斎橋の錦絵に売れ筋であったようです。その姿は、当時の子どもの遊び道具に錦絵を切り抜いて組み立てる「立版古」も販売され、それは錦絵5枚にもなる大作でした。今回の「心斎橋展」では中尾書店さんが復刻され販売されています。



明治42年には心斎橋は年配の方々には懐かしい、緩やかなアーチを描く石造りの眼鏡橋に姿を変えました。昭和39年に長堀川が埋められるまで、橋を渡る多くの

人々の行き交う足跡で磨がかれ、実に足ざわりのいい橋でした。長堀川が埋め立てられる時、心齋橋商店街の方々が尽力され、長堀川を埋め立て橋としての機能を失った心齋橋を取り壊したい大阪市と調整し、石橋を陸橋として残すよう運動されました。そのお陰で、心齋橋の象徴であった石橋の欄干とガス燈



が残されました。しかし、せっかく残したガス燈であっても不似合いな色合いに塗り替えられてしまっただけで残念に思っています。

ガス燈の姿は、明治45年に心齋橋の上から生駒山を眺めながら夕涼みする様子を描いた中津弘光画「畿内見物」や、昭和15年、藤澤恒夫著「淡雪日記」の装丁に田村孝之介が描いています。



江戸時代出版社が軒を並べた心齋橋筋



では、江戸時代の心齋橋界隈にはどのような店がならんでいたのでしょうか。実は、自社出版した本を扱ったり、古書を預かったりする出版屋さんが数多く軒を並べていました。その賑わいは、「撰津名所図会大成」心齋橋本屋店頭図に描かれています。その中でも老舗だったのが、今のかわち画材店の場所にあった松村武兵衛さんの店舗がありました。

昔の本屋は出版業も兼ねていて、自社の本を売るだけでなく、他店の本を取り寄せたり、古本も売っていました。当時大阪は商売の町で、商売の為に「読み書きそろばん」は必須。当時は世界的にも識字率の高い大阪ゆえ

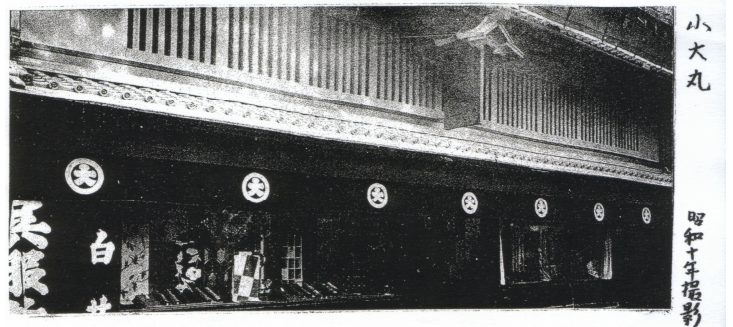
に、出版業は自然発生的に派生した生業。心齋橋筋でも特に南船場方面は、江戸時代からの本屋街として有名でした。その中でも現在のカワチの場所（心齋橋筋一丁目）にあった敦賀屋九兵衛は、尾崎雅嘉著「百人一首一夕話」（ひやくにんいっしゅひとよがたり）という本を出版。百人一首の一首ずつ解説する名著は今も岩波文庫として上下刊出版されています。

八幡筋と三津寺筋の間の東側、昔のおぐら油本店の向かいには、阿波野文三という本屋さんがありまして、男の子用の本には兜や群配を、女の子用にはかわいいお雛さんの絵が拍子に描かれています。当時の本は松の葉つなぎの模様などの本が多い中で、こんな可愛い表紙絵をデザインするなど大阪の商人らしく目に付く本を売り出しています。

又書籍とは別に、大阪では当時一般的には錦絵と呼ばず、「判子」と呼び「判子屋さん」も多く軒を連ねていました。子ども用には、絵本のような当時誰でも知っていた大人国と小人国の物語や、化物を並べたカラーの印刷物を作っては販売していました。パロディー化した芝居絵など子供用のものも多く印刷していました。今日は、「変わり絵」といって線にそって折りたたむと違う絵が浮かぶ判子を持参してきましたので、興味のある方は持ち帰ってへらか物差しで折って昔の子どもに戻って折って楽しんでみてください。

暖簾に風が舞う戦前の心齋橋筋の通り

さて、戦前の心齋橋についてお話ししましょう。島之内生まれの私にとって戦前の心齋橋は子供の頃からの遊びであり、なつかしい場所です。昭和20年の戦災で島之内から離れ、今は池田に住んでいますが、何の用事なくても月に2、3度は自然に足が向いている場所でもあります。心齋橋には、私自身の幼年時代の思い出と重なってさまざまなお話をしたいのですが、その中でも特に思い出深いのが、小大丸と久保田扇舗の店構えは歌舞伎



が好きな私の目にはまるで芝居の舞台そのままの趣がありました。戦前の心齋橋筋というと、今のソニービルの裏側、中尾書店さんの隣で、歌舞伎俳優、初代中村雁



久保田扇舗 昭和十年撮影

の下影」にも江戸時代の店構えが書き残されています。出前する職人や箱寿司を作る職人、持ち帰り用の寿司をまっている客人の姿もありますが、今も当時のままに、おすし屋さんを続けられています。江戸前すしとは異なる、箱寿司は何層にも具をいれる大阪独特の食べる芸術品です。是非、この会場のお近くのですので今日の帰り道にでも、立ち寄って味わってみてください。



次郎の長男の林長三郎のお弟子さんで林長治郎、後に美貌で売った長谷川一夫が経営していたタレントショップの第一号ともいえるフルーツパーラー蝶屋がありました。昭和10年11月の食通というグルメ本の中に蝶屋の広告がありました。同じ号に不二家の広告もありました。

昭和4年の商店の絵図は住まいのミュージアムで町並みをミニチュアで再現されました。その中には今回の「心斎橋展」でも紹介されている丹平薬局があり、娘さんのために樟蔭女子高校を作ったりされていましたが今は心斎橋から店

舗はなくなりました。江戸時代から続く小丸に履物の天狗などは今も健在ですが、時代の流れで多くの店舗が入れ替わりました。心斎橋筋の老舗というと大丸の前に「本福寿司」というお店がありますが、こちらは「花



福ずし 江戸時代店頭 日影の下影

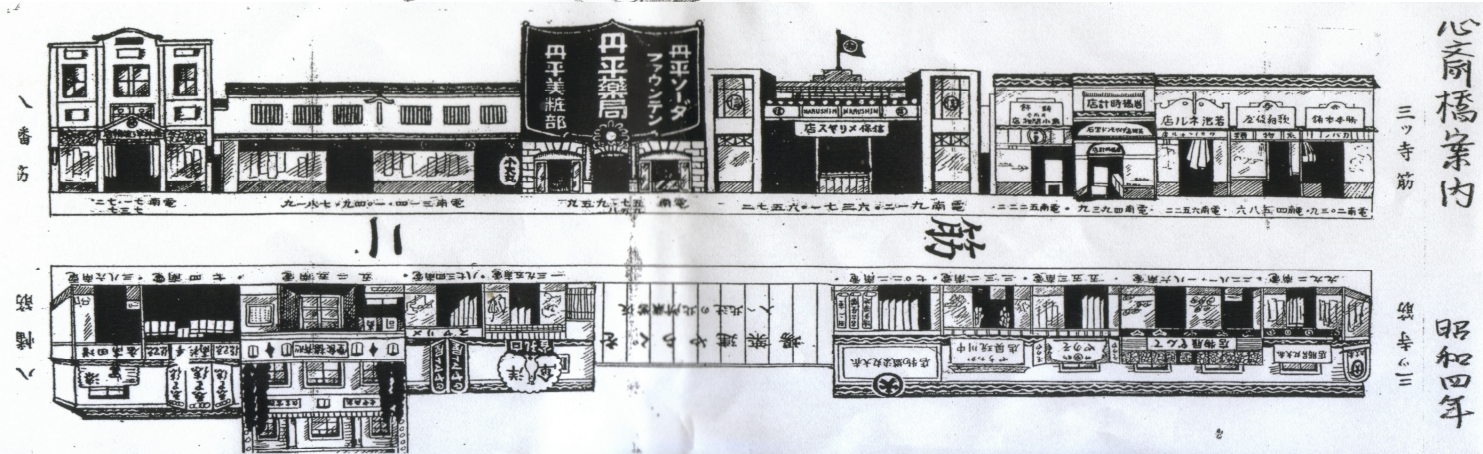
時代は移り変わっています。フランスから職人を呼んで昭和の初めから美味しいパンをうっていたプランタンが閉店に追い込まれました。それは平成15年6月21日の朝日新聞の記事で紹介されていました。「風景を歩く心斎橋・遠ざかる昭和の記憶」

背筋がピンと伸びるようなハイカラな華やかさ。大阪万博から数年後でも手を引かれて歩いた心斎橋にはそんな趣があった。幅6メートルの通りをはさんで、和、洋装品の店や貴金属の店舗が軒を連ねた。「心斎橋で買ってん」は、舶来や高級品を暗にさす言葉だ。

街の空気が変わったのは、いつからだろう。携帯電話や激安ショップが並び、夕暮れには黒服の客引きが通りをゆく人たちに声をかける。

人込みをすり抜けた先に一軒、モンドリアンの絵画を思わせる外観の喫茶店が息をひそめるように残っていた。一心斎橋プランタン。「お客さんが、ここは昔のままやと言うてくれはるんです」店長の河上俊風さん(44)はいう、吹き抜ける店内を、らせん階段が登っていく。デザインしたのは、そごう大阪支店を設計した建築家の故・村野藤吉。日本が復興から高度成長への道を掛け上がる56年の作品だ。だが、店は不況の店を受け、今月末で閉まる。戦前から心斎橋を見守ってきた「そごう」の解体に合せたかのように。昭和がまた一步、遠ざかる。」

そごうの話がでましたが、現存する大丸の建築もよく見てください。玄関を入ってもう一度見渡してください。大阪には、高島屋、阪神・阪急・近鉄とありますが他は



心斎橋案内 三ツ寺筋 昭和四年

今様つれづれ草 橋本雪後

春の夕、格子に踊るの影をつくり、淡月、茶旗のはためきを地に印せる、疊屋町吉兆子の門を訪れたるば、あるじ得意の庖丁に、春の茶料理を味はんがためなり、吉兆子、風格恬淡によく俳を解し、茶を解す、而してその庖丁又すぐれて互えたり、一肴出で、箸を上ぐる毎に、われ駄俳を以て應酬する所以、蓋し清娛を同氣に求むるとやいはん。

○牀、中西焔石筆 筍と豆、ほそもの

句 早きもの豆と筍繪となりぬ

○花、都わすれ、貝母、器古備前

句 貝母と挿す都忘れや春の夕

○膳 朱一閑

竹の皮包、裏銀、思ふに光琳の趣向を利かせたるもの

小蝦 いか つくし 小鮎すし 野游の心乎

句 野游や光琳偲ぶ竹の皮

○玉子酒 味に甘酒をきかせたり 器永樂

句 花の冷玉子酒とは氣が利きぬ

○飯 蒸し、ほぐしたる蟹を秘めたり 器半七

句 飯むしや蟹が肥え來し春の闇

○田樂 器飛騨春慶

木の芽の縁と春慶の黄と、見る目いと麗はし

句 串ぬいて木の芽田樂崩しけり

○刺身 鯛、生鱧 ばうふ 器永樂雲錦

句 櫻鯛雲錦とこそはねつらん

○菓子碗 筍 餅麩、鳥たゞき 花漬、山椒、花漬鹽をぬき

たるいふばかりなく味長し

句 筍や西山さくらいまだしき

鹽ぬいて花づけ淡きかすみとも

○炮烙蒸し 大鰯 伊勢蝦、器半七

句 長閑けきは炮烙むしのかれひかな

○蕨飯

器倣祥瑞

句 山住の法師食らふやわらび飯

酒杯に初代竹泉、樂吉左衛門などを啣みしは望外の喜びなりけり。

同人 大月号（昭和14・6・1）

売り場面積を広げる為に増築続きで、建物の焦点がなくなっていますが、敷地を広げることができないために、百貨店全盛期の姿を今に伝えています。二階にあがる大理石の階段はすばらしい。階段の段の高さが低めで年寄りには上がりやすくなっています。立て直されるそごうは高層ビルになり、隣の大丸はかがみ込んだような高さになりますが、素晴らしい建物を大阪の町の美観保持のために残す為には、多くの人に利用してもらわないと消えてしまいます。是非大丸に足を運んでください。

それと、大阪はくだおれだといわれますが、大阪の名店として名高い「吉兆」。吉兆は大阪の今宮えびす（十日えびす）の笹、吉兆笹より名を取って、昭和5年、湯木貞一さんが大阪の新町に店を出し、その天才的な味が話題を呼んで、昭和10年に心齋橋の八幡筋の近くに店を出されます。その店にお茶屋さん川口軒の主人橋本雪後も句会に参加し、今洋つれづれ草という同人6月号として昭和14年6月1日に発刊された中に吉兆で食事しながら、句を書き残しています。その川口軒には、父の勧めで若い日の笑福亭松鶴さんが修行していたのですが、やがて落語の世界に戻っていきます。食べるだけではなく、料理が供されるたびに、一首づつ書き添えながら、食事を楽しむ風流な人々が集った人々が、モダンでおしゃれな心齋橋の空気を作っていたのでしょう。

今日は、心齋橋についてお話をしましたが、学芸員の橋爪さんのお話を聞いて、美術館の展示物をご覧頂き、モ

ダニズム心齋橋について振り返っていただければと思います。

モダニズム心齋橋店の見所

和服姿の肥田先生の後には、トトロのような体型の大柄で髭に眼鏡のは大阪市立近代美術館建設準備室の主任学芸員の橋爪節也氏へバトンタッチ。スライドを壁に映して展示品の代表作について30分ほどについて解説、その後会場に場所を移してゆっくりと作品を鑑賞。モダンな心齋橋へゆっくりとタイムスリップすることができた。

モダニズム心齋橋作品の解説

大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員の爪節也氏

大阪の地盤沈下が唱えられて長いのですが、大正14年（1925）年大阪市が周囲の町村を合併し、人口280万の「大大阪」となり、シカゴに次ぐ世界第六のマンモス都市が誕生。昭和7年（1932）年の『大東京』成立まで大阪は日本最大の都市として賑わっていました。経済発展優先の気風の中で、美術の解説書には大阪を取り上げられることは少ないのですが、大阪の合理性は、暮らしの舞台、町の造形美を追求する形で、大正時代にはモダニズムの風によって開花します。そのメッカが、心齋橋であったといえます。

御堂筋に整然と高々と並ぶガス灯の輝き、心齋橋の橋脚。呉服店から発展し「そごう」や「大丸」に「高島屋」のショーウィンドウはさながら、庶民の憧れを写す窓のように人々の熱い視線を集めました。昭和8年に御堂筋線の開通と足並みをそろえ鉄筋コンクリートに大理石の内装などアール・デコ調の重厚な近代建築に生まれ変わった「大丸」。それから2年後の昭和10年には隣接する「そごう」が「ガラスと大理石の家」をテーマに村野藤吾の設計で8階建ての新社屋を建設しました。シンプルでモダンな新築のストライプの御堂筋側の外壁のアクセントには巨匠ロダンの助手・藤川勇造の巨大な彫刻「飛躍」が置かれ、店内のエレベーターの扉は島野三秋の漆螺鈿装飾が配され、貴賓室扉が奥村霞城の蒔絵で、鶴丸梅吉の天井モザイク、ウィーン工房出身の上野リチの天井ガラスなど、館内の至るところに和を意識した匠の作品が輝いていました。各百貨店では美術部ができて、横山大観や竹内栖鳳、富岡鐵斎などの東西の大家や、地元画家の山内愚庵や北野恒富らの個展も開かれ町の美術館の役目を果たし、画材店や画廊が軒を並べ始めると芸術家が集うようになりました。

モダニズムの風を吹き放ったのが大正8年に右隣の高島屋の火災で木造の家屋を類焼したために、モダンな三階建ての洋館を再建した「健脳丸」で知られる「丹平ハウス」が大きな役目を果たしたといえます。一階は心齋橋筋から奥の別館まで通路が抜け、通路北側が薬局・南側のソーダ・ファンテンでは、アメリカ式の大大理石のカウンターに清涼飲料機械・自動洗浄機械を導入。ソーダー水・アイスクリームやホットドッグ・丹平サンドウィッチなどを販売していました。2階には美容室に写真室に画廊。3階には赤松麟作の「赤松洋画研究所」には250名が在籍し若手の洋画家や学生が出入りし、「丹平写真倶楽部」では前衛的な写真が生み出されました。今回は、赤松麟作の「裸婦」や松本悦次の梅田の地下鉄御堂筋線工事の様子を描いた「地下鉄工事」に、堂々とした体格の若い女性の等身大の姿を描いた田川寛一の「水

泳選手 Mi 嬢」などの作品も見所。

又、モダニズムの波の裏で、平野町にあった封筒や文房具を商う「柳屋」は竹久夢二の木彫りの看板を挙げ、夢二の木版画も商い、柳屋とサインがある作品は大阪の「柳屋」が版元である。その他暖簾や天井絵、装飾幕、包装紙など「柳屋」のトータルデザインを担ったのが後の人間国宝で陶芸家の富本憲吉氏で、柳屋は「美術と文藝」という夢二の表紙や富本憲吉の木版を機械刷りにした表紙で小冊子を刊行しています。

年配の方々には懐かしい石橋の心齋橋にガス灯、立ち並ぶモダンな店、美術館内の展示物を見て、町の造詣に拘った大阪人の心意気や賑わいをゆっくりご覧いただければと思います。

また今回の「モダニズム心齋橋」は図録がわりに大阪都市協会発行の平成17年2月11日発行の「大阪人」をご覧いただければと思います。



出席者：アワイエ順・敬称略

一般：石見哲子・猪俣恵子・石川余美子・今大路宏三・江島公義・大井麻由美・大杉和幸・大西秀紀・大西宏子・楠瀬恵美・佐原純一郎・末廣和子・瀧澤裕英子・久喜千恵子・佐伯恵美子・高橋俊太郎・土井玲子・豊田美敬・中尾良男・中尾靖・中西ちえ子・中塚達美・成重佳奈・長島平洋・長島雅子・西山好子・桧垣宏之・藤井克郎・本田耕造・本田哲子・古川武志・森欽子・松井佐知子・山下昇雲・山根康男・余部光男・余部武男

塾生：秋山建人・大森史子・北原祥三・北村千代江・熊谷京子・佐々木英彰・田中稔三・中村孝夫・原田彰子・堀内紀江・藤戸稔也・村上蕪芳・森川千世子・山本ゆき

旭堂小南陵さん

“大阪文化祭グランプリ”受賞お祝いの会

日時：2005年3月23日(水)

午後6時半～8時半迄

会場：ホテル日航大阪 5階 鶴の間

TEL 06-6244-0002 御堂筋線「心齋橋」すぐ

会費：一万円也 (当日会場受付にて清算)

発起人：桂三枝・小篠綾子・近藤正臣・谷康滋・常盤津一巴太夫・中田昌秀・成瀬国晴・難波利三・西川きよし・藤本義一・松本孝

呼びかけ人：喜多條清光・北原祥三・旭堂南太平洋・野杵育郎・灰谷幸・間征一※18日締切で申込ます。

文楽と中国古箏 春の競演

お初徳兵衛 曾根崎心中 天神森の段

出演者：

人形：桐竹勘十郎・吉田玉女 他

大 夫：豊竹呂勢大夫・豊竹咲甫大夫・豊竹陸大夫

三味線：鶴澤燕二郎・鶴澤清志郎・鶴澤清道

中国古箏：伍芳

日時：2005年4月29日(金・祝日)

開場：18時30分・開演：19:00

会場：四天王寺 中心伽藍(五重塔前)

会費：3700円(税込)全席指定 主催：ラジオ大阪